

## 「泳ぐこと」と「漕ぎ続けること」(後)

——“The Swimmers”における「泳ぐこと」の意味——

山路 雅也

### 内容目次

1. アメリカ娘が指南する「泳ぐこと」——沖合に「浮く」こと、そして「汚れを落とす」こと——
2. Henry が実践会得する「泳ぐこと」——“the exercise of the most transcendent imagination”による半具象化された想像世界の幻出——……………(以上, 第20号)
3. *Gatsby*におけるもう一つの「泳ぐこと」
4. 「泳ぎ手」*Gatsby*と“His Father’s Business”
5. *Gatsby*の悲恋と Dutch sailors のもう一つの「泳ぐこと」
6. 「漕ぎ続けること」の意味
7. 「泳ぐこと」の意味……………(以上, 本号)

### 3. *Gatsby*におけるもう一つの「泳ぐこと」

“The Swimmers”に先立ち四年前に既に提示されていたもう一つの「泳ぐこと」を、我々は *Gatsby* の第九章に見出だせよう。主人公 Jay Gatsby の死後、語り手 Nick Carraway が主を失い清秋の月夜の下、肅肅とする Gatsby 邸に独り足を運びそこで沈思黙考する、あの余りに有名な場面におけるそれは描かれる。Nick はそこで Jazz Age からアメリカ黎明期へと時代を一気に溯上し、かつての入植者たちのヴィジョンへと思いを馳せてゆく。すると遠大なる時空を越え復刻されたもう一つの「泳ぐこと」が提示されるのだ。

Most of the big shore places were closed now and there were hardly any lights except the shadowy, moving glow of ferryboat across the

Sound. And as the moon rose higher the inessential houses began to melt away until gradually I became aware of the old island here that flowered once for Dutch sailors' eyes — a fresh, green breast of the new world. Its vanished trees, the trees that had made way for Gatsby's house, had once pandered in whispers to the last and greatest of all human dreams; for a transitory enchanted moment man must have held his breath in the presence of this continent, compelled into an æsthetic contemplation he neither understood nor desired, face to face for the last time in history with something commensurate to his capacity for wonder. (140)<sup>(1)</sup>

先に触れた“*The Swimmers*”第二章結末部の場面を思い返したい。Henryは帰国の途上、船上の人となることで「泳ぐこと」に当たっていた。文字通り船上の人である Dutch sailors も同様に、目指す“a fresh, green breast of the new world”を波間に遠望することで、彼等のそれに当たっていたのだ。

このもう一つの「泳ぐこと」が一見したところ、先述した“*The Swimmers*”のそれと同様の展開を示していることは、一目瞭然であろう。現前の具体像，“a fresh, green breast of the new world”を糧に、「泳ぎ手」Dutch sailors の“the exercise of the most transcendent imagination”はその効力を存分に発揮する。すると遠望される新大陸の地は、未開の原野たるその相貌を波間に溶解消失させ、そこに“the last and greatest of all human dreams”にも匹敵し得る“something commensurate to [their] capacity for wonder”が幻出する。そして Dutch sailors は、いつしか“æsthetic contemplation”へといざなわれるが、それは我々に、Henryの内に沸き返っていたあの法悦にも似た強烈な Americanism を想起させよう。

この様に“*The Swimmers*”に先立つ四年前、*Gatsby*においてもう一つの「泳ぐこと」が既に提示されていたわけだが、次に我々は *Gatsby* に描かれるそれを更につぶさに検討してみたい。すると一見鮮やかなパラレルを描くかに思われる二つの「泳ぐこと」が、実は似て非なるものであることが判明するであろう。そして我々はそこに、“*The Swimmers*”における「泳ぐこと」の真意解明のための糸口を掴むことになるのだ。

#### 4. 「泳ぎ手」Gatsby と “His Father’s Business”

*Gatsby* におけるもう一つの「泳ぐこと」の詳細を検討する際、見落としではならぬのは先の引用直後に綴られる Nick の感慨, “And as I sat there brooding on the old unknown world, I thought of Gatsby’s wonder when he first picked out the green light at the end of Daisy’s dock.” (140) であろう。ここで Nick は、かつて Dutch sailors の眼前に迫り来た “a fresh, green breast of the new world” が、Daisy Buchanan 邸に明滅する “the green light” に呼応しており、前者が “something commensurate to [their] capacity for wonder” と化した様に、後者の灯る邸宅の住人 Daisy もまた “Gatsby’s wonder” へと転じていたことを明かすのだ。Nick の脳裏において、もう一つの「泳ぐこと」に当たった Dutch sailors のヴィジョンと Daisy への想いに胸を焦がした Gatsby のそれとが、等号で分かち難く結ばれているのである。このことから我々は、Gatsby と Daisy が織り成すこの Jazz Age の悲恋と、Dutch sailors がアメリカ黎明期に当たっていたもう一つの「泳ぐこと」との間には、時空を越えた共通項があると考えべきであろう。

そう考えればこそ、第一章結末部に描かれる崇高なまでの美しさを湛えるも謎めいた場面、即ち Gatsby が銀砂を撒いた様な星空の下、Daisy の邸宅に灯る “the green light” を対岸に見遣り、傍目にも分かる程に激しく身をうち震わせる場面 (20) にも合点が行く筈だ。この時、Gatsby もまた Dutch sailors 同様, “aesthetic contemplaion” に浸り、痺れる様な法悦に身を委ねていたのである。

“... there was one persistent story that he didn’t live in a house at all, but in a boat that looked like a house and moved secretly up and down the Long Island shore” (76) と指摘される豪邸から、Daisy の邸宅の “the green light” を対岸に遠望し法悦にうち震える Gatsby の姿、それはもう一つの「泳ぐこと」に当たる Dutch sailors のそれを、換言すれば船上の人となることで「泳ぐこと」に当たる「泳ぎ手たち」のそれを彷彿させて止まない。彼がノースダコタの貧農の倅から Jay Gatsby なる人物へと再生を遂げたのは、Dan Cody 所有のヨット目掛け自らオールを手にしたその時であった (76)。そして彼が凶弾に射貫かれ冥府の淵に沈んだいったのも、船上の人さながらプールのみなもに揺蕩うマットレスに身を委ねていた正にその時なのであ

る (126)。船上の人として生まれそして死に行くその生涯が描かれるに及び、Gatsby は「泳ぎ手」としての相貌を、はっきりと帯び始めよう<sup>(2)</sup>。

Gatsby は “His Father’s Business” (77) なるものをその信条としている。「泳ぎ手」としての相貌を帯びる彼が奉ずるその信条とは、一体如何なるものなのか。“a son of God” (77) である彼は、それに愚直なまでに忠実であろうとする。彼は己が存在を賭することさえ辞さぬのだ。

He was a son of God—a phrase which, if it means anything, means just that—and he must be about His Father’s business, the service of a vast, vulgar and meretricious beauty. So he invented the sort of Jay Gatsby that a seventeen year old boy would likely to invent, and to this conception he was faithful to the end. (77)

彼は James Gatz という卑小な自己を素材に “Platonic conception of himself” (77) を慈養してゆく。“His Father’s Business” とはこの様に、实在物を素材にそこから “Platonic conception” を抽出すると、それへの終生変わらぬ専心を誓うことに他ならない。これが四年の歳月を経て先述の “The Swimmers” における「泳ぐこと」の本質——Stern の指摘する “the exercise of the most transcendent imagination”——へと連なることは言うまでもなかろう。“His Father’s Business” とそれに邁進する “a son of God” とは、それぞれ「泳ぐこと」の本質である “the exercise of the most transcendent imagination” と、それに当たる「泳ぎ手」の別称なのである。

従って “a son of God” に用意される御座もまた、“The Swimmers” における「泳ぐこと」の展開を念頭に置きつつ考察されるべきであろう。Bruce L. Grenberg が Fitzgerald の小編 “Outside of the Cabinet-Make’sr” (1928) に対して示す見解は、その一助となろう。

この小編では、幼い娘の為に主人公の男性が、周囲の事物を盛り込みながらおとぎ話を即興で拵えてゆくプロセスが綴られている。Gatsby とこの作品の間には通底するものがあるとする Grenberg は、男性の拵えるおとぎ話の本質を、“in itself insubstantial yet founded upon the objective details of the neighborhood scene” (122) と捉え、そこにこの作品の “a persistent, emphatic leitmotiv of oppositions, or interpenetrations, between reality and imagination” (122) を感知している。

“the objective details”に依拠しつつなお“insubstantial”であり続けるもの、“Outside of the Cabinet-Maker’s”において主人公の男性と愛娘が抱かれるこの世界こそ、“a son of God”に用意される御座に他ならない。そこでは“the incomparable milk of wonder” (86) —— “his capacity for wonder”に拮抗し得る“the most transcendent imagination” —— が渾渾と湧き出で、“a son of God”は“satisfactory hint of the unreality of reality” (77) に浴しつつ、それを心行くまで堪能することが叶うのだ。“the objective details”に依拠するゆえ鮮烈な迫真性を帯びるも、あくまで“insubstantial”である状態、即ち“interpenetrations, between reality and imagination”を堅持するこの希有な世界もまた、“The Swimmers”において引き継がれていることは言うまでもなかろう。「泳ぐこと」により幻出していた半具象化された想像世界がそれである。

## 5. Gatsbyの悲恋と Dutch sailors のもう一つの「泳ぐこと」

以上の様に Gatsby が「泳ぎ手」としての相貌を帯びることを踏まえた上で、次にそんな Gatsby の悲恋と Dutch sailors の当たるもう一つの「泳ぐこと」が有する共通項の考察に移りたい。我々はその手掛かりを Kermit W. Moyer が示す見解の内に得ることになろう。

Moyer は Gatsby の悲恋を “To repeat it is not just Daisy Gatsby wants but something beyond her; he wants that moment when life seemed equal to his capacity for wonder, and that moment is indissolubly wedded to Daisy herself, to materiality.” (218) と概観する。更に Moyer はその核心を “. . . Gatsby combines transcendental imagination with time-enthralled materialism . . . . Gatsby’s story is a mirror which reflects an image of American history.” (218-219) と突いてみせる。Moyer は Gatsby の悲恋の本質を、“transcendental imagination”と“time-enthralled materialism”の癒着と見抜き、更にそれを“an image of American history”と捉えている。Moyer はこの癒着を Jazz Age の悲恋にのみ限定せず、そのアメリカにおける連続性を訴えるのだ。この“transcendental imagination”と“time-enthralled materialism”の癒着こそ、Jazz Age の Gatsby の悲恋と Dutch sailors によるアメリカ黎明期のもう一つの「泳ぐこと」が時空を超え有する共通項なのである。

Gatsby は “a son of God” ならばこそ、Daisy との関係においても己が信条 “His Father’s Business” の貫徹に全身全霊を捧げるべきであった。だが彼はあろうことかそれを放棄してしまうのだ。たとえ Daisy に対する想いにどれ程狂おしくその胸を焦がそうとも、彼が求めるべきは決して一個の女性であってはならぬ筈だ。“His Father’s Business” に倣うならば、彼女は “time-enthralled materialism” に支配される現実世界の住人であり、そこから “Platonic conception” を抽出すべき、卑小な “materiality” に過ぎない。Gatsby が腐心すべきは Daisy という一個の女性の獲得ではなく、“Platonic conception of [Daisy]” への永久の専心なのである。

それを充分承知していたにも拘らず、Gatsby は “a son of God” としてあるまじき大罪を犯してしまう。ここで先述の共通項, “transcendental imagination” と “time-enthralled materialism” の癒着が持ち上がる。彼は件の癒着を Daisy と出会って間無しに招いてしまうのだ。第六章に描かれる 1917 年秋の宵の二人の逢瀬の場面は、その様をつぶさに捕らえている。

He knew that when he kissed this girl, and forever wed his unutterable visions to her perishable breath, his mind would never romp again like the mind of God. So he waited, listening for a moment longer to the tuning fork that had been struck upon a star. Then he kissed her. At his lips’ touch she blossomed for him like a flower and the incarnation was complete. (86-87)

星空から零れ落ちる “the tuning fork” の甘美なる響きも、Gatsby に逡巡させるも大罪を踏み止どまらせることは出来なかった。“his unutterable visions” を “her perishable breath” に結び付けることは、先述の “transcendental imagination” と “time-enthralled materialism” の癒着に他ならない。それは「泳ぐこと」の本質, “the exercise of the most transcendent imagination” に抵触すると、それを頓挫させてしまうのである。この場面はやがて第八章での Gatsby による胸中の吐露, “What was the use of doing great things if I could have a better time telling her what I was going to do?” (117) へと連なると、その頓挫をいやが上にも際立たせるのである。

この様に Gatsby の悲恋は、件の癒着を端緒とする “the exercise of the most transcendent imagination” の頓挫をそこに映し出すが、それが内包す

るのはこれだけではない。それはこの癒着を招くという大罪を犯してしまった“a son of God”の行く末もまた示すのだ。つまり Gatsby の悲恋とは、この癒着を招いてしまったがゆえに代償を払うことを余儀なくされるその顛末の記録に他ならぬのである。

大罪を犯した“a son of God”を待ち受けるもの、それは己が御座——“interpenetrations, between reality and imagination”といった絶妙な均衡の上に成立する“the old warm world” (126) ——からの放逐である。つまり Gatsby の前で、Daisy という卑小なる“materiality”の実相が顕となるとそれまで彼が営々と慈養してきた“Platonic conception of [Daisy]”も瓦解してしまうのだ。

先に引いた 1917 年の秋の宵の場면을境に均衡を崩し始めた“interpenetrations, between reality and imagination”は、その後も軋みを上げつつ辛うじて体裁を保つも、1922 年の夏の盛りに遂にその終焉を迎えることになる。ニューヨークはプラザホテルのスイートにおいて、Gatsby と Tom Buchanan が Daisy を巡り攻防戦を繰り広げる、第七章の場面 (98-106) はそれが崩れ去りゆく様を捕らえたものだ。

この場面において、もはやかつての様に“the incomparable milk of wonder”が湧き出づることもなければ、“satisfactory hint of the unreality of reality”に身を委ねることも叶わない。前者は疾うに涸れ果て、後者は雲散霧消しその痕跡すらとどめない。ただ室内に立ち籠める噓せ返る様ないきれが、Gatsby を包み込むばかりだ。すると Daisy はあろうことか“an indiscrete voice . . . full of money” (93-94) を震わせ Tom への愛をも肯定し、その余りに卑小な実相——“a quality of distortion” (137) が支配する、“a night scene by El Greco” (137) の如き世界に蠢く“careless people” (139) ——を顕にしてしまう<sup>(3)</sup>。そして“Platonic conception of [Daisy]”が、慄然とするばかりの Gatsby の前で跡形もなく瓦解すると、これをもって“a son of God”の御座からの彼の放逐は完了するのだ。

Gatsby の悲恋とは、件の癒着を招いてしまったがゆえに代償を払うことを余儀なくされるその顛末の記録であると先に述べたが、ここにその代償の内容が明らかになるろう。“the exercise of the most transcendent imagination”の頓挫により迫られる、“materiality”の卑小なる実相とその“Platonic conception”の瓦解双方の受容、というのがそれである。そしてこの悲恋との共通項を有する以上、Dutch sailors のもう一つの「泳ぐこと」

もまたこうした顛末を全てそのまま内包するのだ。

GatsbyがDaisyという一個の女性を獲得してしまった様に、Dutch sailorsも目指す新大陸の地をやがて足下にしてしまったであろうことを、我々は忘れてはなるまい。先に引いたMoyerの見解通り、ここに“transcendental imagination”と“time-enthralled materialism”の癒着という共通項が生じることになる。第一章で“the green light”を対岸に遠望するGatsbyの姿と、第九章で波間に“a fresh, green breast of the new world”を見遣るDutch sailorsのそれとは、同じ大罪を犯す“[sons] of God”ならではの著しい近似性を呈していたと言えよう。両者の間には、片や既に件の癒着を招きその代償をいま正に払わんとする者と、片や件の癒着をいま正に招かんとする者という、ごく僅かな差があるに過ぎない。この様な両者が先述の通りNickの脳裏でヴィジョンの共有を果たす時、時空を遙かに超えた遠大なるスケールの下で同じ轍が連続と踏まれ続けてきたとの認識が、圧倒的な説得力をもって迫り来よう。

従って“a fresh, green breast of the new world”もまた、Dutch sailorsの前に“materiality”としての卑小なる実相を晒したに違いないことが強く示唆されるのだ。それが“the solemn dumping ground” (21)である“a valley of ashes” (21)へと連なる資質を秘めた“a new world, material without being real” (126)なる実相を晒すと、彼等が慈養したその“Platonic conception”は無残に瓦解したのである。

Doctor T. J. Eckleburgの広告看板が他ならぬここ“a valley of ashes”で不断の凝視を続けていることは、その証左に他なるまい。それを神と畏れそこに暮らすガレージの主人、George Wilsonが漏らす言葉、“God knows what you’ve been doing, everything you’ve been doing . . . . God sees everything” (124-125)は、不貞を働く彼の妻に対してのみ向けられたものではあるまい。それは、“His Father’s Business”を繰り返し頓挫させてきた全ての“[sons] of God”に向けられた詰問なのだ。“God sees everything”と彼が漏らす通り、神は全てを見通しているのだ。己が足下となった新大陸という“materiality”の余りに卑小な実相を、即ちやがて“a valley of ashes”へと連なることになるその潜在的資質を、かつてDutch sailorsが受容するよう迫られたであろうことが、その御前においては詳らかとなっていることを示すべく、神はその巨眼をここに曝しているのである。

## 6. 「漕ぎ続けること」の意味

以上の様に見鮮やかなパラレルを描くかに思われる *Gatsby* の「泳ぐこと」と “The Swimmers” のそれとは、実は似て非なるものであることが容易に見て取れるであろう。前者は “transcendental imagination” と “time-enthralled materialism” との癒着を端緒とする、“the exercise of the most transcendent imagination” の頓挫とそれに伴う一連の展開を、アメリカにおいては連綿とし且つ遍在するものとして提示している。一方、後者はその頓挫ではなく貫徹の可能性を訴え、しかもそれを先の Sklar の指摘通り、“national purpose” と捉えるのだ。つまり後者は前者のアンチテーゼとなっていたのである。

こうして我々は “The Swimmers” の「泳ぐこと」の真意に一步近付いたわけだが、これに関連して注目すべきは *Gatsby* の末尾であろう。何故ならそこには四年の歳月を経て “The Swimmers” の「泳ぐこと」へと連なる、その兆しが既に表れていたからである。

*Gatsby* believed in the green light, the orgiastic future that year by year recedes before us. It eluded us then, but that's no matter — tomorrow we will run faster, stretch our arms farther . . . . And one fine morning —

So we beat on, boats against the current, borne back ceaselessly into the past. (141)

ここに「泳ぐこと」のイメージを見出だすことは難くない筈だ。船上の人を連想させる “boats” がそれである。このことから窺える通り、“the past” へと流されぬよう “boats” を懸命に「漕ぎ続けること」こそが、“The Swimmers” の「泳ぐこと」へと連なる兆しなのだ。

それではこの「漕ぎ続けること」とは具体的には何を意味するのか。まずそれが直前の段落の意味内容—— “the orgiastic future that year by year recedes before us” という謂わば眼前に在りながら決して到達し得ぬ未来を追求すること——を補完していることに注意したい。それを踏まえつつ、André LeVot の見解に当たるならば、彼の見解は「漕ぎ続けること」の意味掌握のための手掛かりを与えてくれよう。

Fitzgerald の詳細な伝記を記した LeVot は彼の未完の作品 *The Last Tycoon* (1941) における音楽の描写に着目する。LeVot はそこに、この作家の特異な姿勢を読み取っている。

This music is only imminent, however not yet heard. Its silence subsumes the whole experience of the search in Fitzgerald's works for the present, an unshakably convincing present that no apparent fulfillment can thrust into the past as a thing achieved . . . .

All Fitzgerald's work seems to aspire to these instants of suspension and equilibrium in which the search for hero and a style tend to blend, in which the action's silence seems to reply to another silence of inner music that destroys itself if it is heard. (166)

LeVot は Fitzgerald による “an unshakably convincing present” への残留の希求を指摘する。こうした作家の姿勢とは換言すれば、目標の “apparent fulfillment” という未来への到達の忌避に他ならず、それは先に引いた *Gatsby* の末尾に記される、あの “the orgiastic future” という眼前に在るも決して到達し得ぬ未来の追求と符合しよう。

こうした LeVot の見解を援用しつつ先の引用に今一度目を向けるならば、「漕ぎ続けること」が逆らねばならぬ “the current” の意味が明らかになる。それは、目標の “apparent fulfillment” という未来に向け人々を執拗に駆り立て押し流してゆく奔流に他ならない。更にその核心に迫って言えば、我々は “the current” を、アメリカ社会において時空を超え滔々と流れ続けるあの奔流と同一視すべきであろう。つまりそれは、Dutch sailors 等入植者達による黎明期の新大陸への植民をその水源とし、Benjamin Franklin (1706-90) の *Autobiography* (執筆 1778-89; 完本発行 1868) をもって本流となると、以降様々な支流との合流や分流を経、19 世紀末の Horatio Alger (1832-99) の作品群による徹底した世俗化を通じ満々と水を湛えるに至ったあの奔流、American dream of success という思潮そのものなのである<sup>(4)</sup>。

引用は “boats against the current” さながら、American dream of success という思潮に抗い、夢の “apparent fulfillment” の回避に向けて「漕ぎ続けること」を論じているのだ。もし「漕ぎ続けること」なく、この American dream of success という “the current” に “boats” を押し流せるに任せてし

まうとどうなるか。“boats”はこの奔流の意のままに翻弄され、作家が忌み嫌う夢の“apparent fulfillment”という未来に到達せしめられると、その受容を余儀なくされてしまう。それは“a thing achieved”の澱む“the past”という浅瀬での座礁を意味し、作家が追求する“the orgiastic future”への航行はもはや叶わぬものになってしまうのだ。

ここで言う座礁が先述の *Gatsby* のもう一つの「泳ぐこと」における“the exercise of the most transcendent imagination”の頓挫に、そしてここで言う“the orgiastic future”が先述の“a son of God”に用意される御座——“interpenetrations, between reality and imagination を堅持し得る世界——に、それぞれ対応していることは言うまでもなかろう。同様に作家が忌み嫌う目標の“apparent fulfillment”とは *Gatsby* のもう一つの「泳ぐこと」における件の癒着に、そして“the past”に澱む“a thing achieved”とは先述したその癒着により顕在化する“materiality”の卑小なる実相にそれぞれ相当するのである。

*Gatsby* のもう一つの「泳ぐこと」が先述の通りその一連の展開をアメリカにおいて連綿とし且つ遍在するものとしていた所以はここにあると言えよう。それは、時空を越え数多の人々が American dream of success という奔流になす術もなく呑み込まれ、夢の“apparent fulfillment”へと駆り立てられ続けてきた証しに他ならぬのだ。だからこそ、第一章で Daisy が漏らす呟き、“You see I think everything’s terrible anyhow . . . I’ve been everywhere and seen everything, and done everything.” (17) は、Jazz Age における己が青春の彷徨を記した作家の好エッセイ“My Lost City” (1945) の中の一節、“ . . . I began to bawl because I had everything I wanted and knew I would never be so happy again.” (*Crack-Up* 26) と同調するのであろう。更にそれらは、20年代アメリカ社会の年代記、F. L. Allen の *Only Yesterday* (1931) の次の記述と共鳴すると、地鳴りの如くに沸き起こるその時代の基調を奏するのである。

. . . in a sense disillusionment . . . was the keynote of the ninty-twenties. With the majority of Americans its workings were perhaps unconscious; they felt a queer disappointment after the war, they felt that life was not giving them all they had hoped it would . . .” (180)

“disillusionment”に支配されるこの時代の基調、即ちその如何ともし難い諦念とは、未曾有の繁栄を現出せしめ目標の“apparent fulfillment”に至ってしまったがゆえに、“a thing achieved”の澱む“the past”に座礁してしまった20年代アメリカ社会から発せられた呻きに他ならない。それは一過性ものではなく、先述の *Gatsby* のもう一つの「泳ぐこと」に反映されていた通り、Dutch sailors の時代より連綿とするアメリカの基調なのである。

しかし、以上のことをもって「漕ぎ続けること」の真意を American dream of success への果敢なる抗いと結論付けるのは尚早と言えよう。それは確かにこの一大思潮に抗うことを論じてはいる。だが我々はその消極性を見落としてはならぬであろう。先の *Gatsby* の末尾におけるフレーズ“*And one fine morning*—”にそれは如実に表れている。何よりも作家自らが成功を夢見、この奔流に身を任せてしまったことを忘れてはなるまい。彼が流行作家として功成名遂げ己が夢の“apparent fulfillment”に至ってしまったばかりに、“disillusionment”に囚われ涙したのは先に引いた通りである。それゆえに作家は、晴れてそれに抗うことが叶う“one fine morning”の到来の有無の明言を避け、このフレーズを唐突に断ち切らずにはいられなかったのであろう。「漕ぎ続けること」は本当に可能なのか、時空を超えアメリカを呪縛するこの余りに強大な思潮に抗い、夢の“apparent fulfillment”を回避することなど果たして叶うのか——こうした作家の大きな揺らぎを、我々読者はそこに感知させずにいられまい。

以上のことから我々は、「漕ぎ続けること」の真意をこの一大思潮の呪縛からの解放を巡る作家の揺らぎの投影と見做すべきであろう。それはその呪縛からの解放の、即ち夢の“apparent fulfillment”の回避の消極的説論と云うべきものなのだ。

## 7. 「泳ぐこと」の意味

「漕ぎ続けること」に纏い付くこの消極性を念頭に置きつつ、先述の通りそれを兆しとする“The Swimmers”の「泳ぐこと」に再度目を転じてみたい。人生の危機を克服した Henry が渡欧すべく、祖国アメリカを後にし船上の人となる場面 (*Bits* 209) をもって、この作品は締め括られる。つまり船上の人なることで Henry は、「泳ぐこと」を最期に今一度披瀝するわけだ。

Henry が船上より“the fading city, the fading shore” (*Bits* 209) を遠望す

ると、最期の「泳ぐこと」はその幕を開ける。波間の祖国の地という現前の具体像が彼の“the exercise of the most transcendent imagination”を触発すると、それはニューヨークというメトロポリス、即ち“the ugly debris of industry” (*Bits* 209) を糧に遺憾なくその効力を発揮、鉄とコンクリートの支配する摩天楼群から“the rich land still pushed up, incorrigibly lavish and fertile” (*Bits* 209) なる世界を幻出してみせる。やがて彼の内に沸き起こる“a sense of overwhelming gratitude and of gladness that America was there” (*Bits* 209) なる濃密な Americanism が、場面全体を覆い尽くしてゆく。

この様にこの最期の「泳ぐこと」は、既述した定石通りの展開を示すわけだが、ここで注目すべきは、この濃密な Americanism が更にその激烈な調子を高め一気に雪崩込む、Matthew J. Bruccoli が指摘するところの“an eloquent peroration” (280) であろう。

The best of America was the best of the world . . . . France was a land, England was a people, but America, having about it still that quality of the idea, was harder to utter — it was graves at Shiloh and the tired, drawn, nervous faces of its great men, and the country boys dying in the Argonne for a phrase that was empty before their bodies withered. It was a willingness of the heart. (*Bits* 210)

作家によるこのアメリカの定義，“a willingness of the heart”とは「漕ぎ続けること」に纏い付いていたあの消極性の産物に他ならない。激烈な Americanism に仰々しく彩られたそれが、「漕ぎ続けること」の消極性に由来するとはいかなることか。

*Gatsby* の末尾において作家は、American dream of success に抗い、夢の“apparent fulfillment”を回避することを巡り、大きな揺らぎを示しつつそれを消極的に論ずることしか出来なかった。それから四年の歳月を経るも作家は、アメリカ社会におけるこの強大なる思潮の如何ともし難い呪縛を鑑み、その揺らぎを鎮静し、己が消極性を払拭する術を未だ見出だせざりたのである。そこで作家は窮余の一策を講じる。それがこのアメリカの定義，“a willingness of the heart”なのだ。

作家はここで、この強大な思潮に抗うのではなく、それを甘受した上で

“a willingness of the heart” に全てを委ねることを決意したのだ。American dream of success を甘受し、夢の “apparent fulfillment” への到達を余儀なくされようとも、“a willingness of the heart” に縋りさえすれば、次の新たな夢のそれへと邁進することが叶うと作家は考えたに違いない。その限りにおいて際限なく再生され得る “the orgiastic future” は、人々を永久に魅了し続けるのであり、彼等は先述の “disillusionment” が支配するアメリカの基調に囚われることを免れ得るのである。

この “a willingness of the heart” とは、上述の揺らぎを緩和し得る、作家にとって残された唯一の寄る辺であったのだ。だからこそ彼は、奮然とする余りそれをもってアメリカの定義とすると、それに華美な文飾を施したのであろう。引用の仰々しい Americanism は、John Kuehl をしてこの作品を “Fitzgerald’s most patriotic short fiction” (110) と言わしめるが、それは作家のこうした姿勢の表出に他ならない。

この大仰な Americanism の内に、Henry の指南役、あのアメリカ娘が彼に向かって放った囁き、“To get clean” の残響が蘇ると同時に、*Gatsby* より通底する「泳ぐこと」の真意が明らかになろう。彼女が「泳ぐこと」の目的を、“To get clean”——厳然たる現実という足枷を汚れを落とすが如くに外すこと——と Henry の為にと要約してみせたことを今一度思い返したい。この一大思潮に抗い切れず、夢の “apparent fulfillment” に到達しようとも、汚れの如くにそれを取り除き、再び新たな夢のそれへと邁進するよう、彼女もまた Henry を論じていたのだ。“a willingness of the heart” への帰伏、これこそが「泳ぐこと」の真意なのだ。「泳ぐこと」とは、American dream of success という一大思潮を巡り、己が揺らぎを何とか鎮めんとした作家の奮然たる想いの結晶だったのである。

\* \* \*

人生の危機の克服を見事に成し遂げた Henry が、「泳ぐこと」を披瀝することで作品を締め括るのは先に述べた通りだ。正にこの場面の主人公と作家本人を Henry Dan Piper は同一視している (177)。人生の危機の克服という “apparent fulfillment” に至って間無しに、その舞台となったアメリカに惜しげもなく訣別し揚々として大西洋の彼方に想いを馳せる Henry の内に Piper が見たもの、それは、“a willingness of the heart” に帰伏しつつ、

“the orgiastic future” が燦然とする彼方に目を遣る作家の姿だったのかも  
しれない。

### 註

- (1) *The Great Gatsby* からの引用は次の版を使用した。F. Scott Fitzgerald, *The Great Gatsby*, ed. Matthew J. Bruccoli (Cambridge UP, 1991) 本文中の括弧内のページ付けはこの版による。
- (2) 作品の冒頭で Gatsby の死を悼む Nick が、彼を擁護すべく用いた表現——  
“No, Gatsby turned out all right at the end; it is what preyed on Gatsby, what foul dust floated in the wake of his dreams that temporarily closed out my interest in the abortive sorrows and short-winded elation of men.” (6; emphasis added) ——も、Gatsby の「泳ぎ手」としての相貌を示唆すべく用いられたものとして捉えるべきであろう。
- (3) この “a night scene by El Greco” への言及が、“In the foreground four solemn men in dress suits are walking along the sidewalk with a stretcher on which lies a drunken woman in a white evening dress.” (137; emphasis added) と続くことに注目したい。第一章において Daisy は白いドレスを身に纏い、寝椅子に横たわった姿で導入されている(10)。更に第四章では彼女が Tom との婚礼の祝宴の直前、泥酔し正体を失いベッドに横たわっていたことが明かされる(60)。以上のことから “a night scene by El Greco” に登場する女性を Daisy と同一視することが妥当に思われる。
- (4) Gatsby の死後、第九章で彼の父親は、Gatsby が少年時代に本の裏表紙に記した日課表を Nick に示すが(135)、それは我々に Franklin の十三の徳目を連想させよう。このことから Gatsby がこの American dream of success という思潮に自ら身を投じていたことが強く示唆される。

### Works Cited

- Allen, Frederick Lewis. *Only Yesterday: an informal history of the 1920's*. New York: John Wiley & Sons, Inc., 1997.
- Bruccoli, Matthew J. *Some Sort of Epic Grandeur: The Life of F. Scott Fitzgerald*. San Diego: Harcourt Brace Javanovich, 1981.

- Fitzgerald, F. Scott. "My Lost City." *The Crack-Up with other Pieces and Stories*. Harmondsworth, Middlesex: Penguin Modern Classics, 1986.
- . *The Great Gatsby*. Ed. Matthew J. Bruccoli. Cambridge: Cambridge UP, 1991.
- . "The Swimmers." *Bits of Paradise by F. Scott Fitzgerald and Zelda Fitzgerald*. Selected by Matthew J. Bruccoli with assistance of Scottie Fitzgerald Smith. London: Bodley Head, 1973.
- Grenberg, Bruce L. "Outside the Cabinet-Maker's': Fitzgerald's 'Ode to a Nightingale'." *New Essays on F. Scott Fitzgerald's Neglected Stories*. Ed. Jackson R. Bryer. Columbia and London: U of Missouri P, 1995. 118-129.
- Kuehl, John. *F. Scott Fitzgerald: A Study of Short Fiction*. Boston: Twayne Publishers, 1991.
- Levot, André. *F. Scott Fitzgerald*. New York: Doubleday and Company, Inc., 1983.
- Moyer, Kermit W. "The Great Gatsby: Fitzgerald's Meditation on American History." *Critical Essays on F. Scott Fitzgerald's The Great Gatsby*. Ed. Scott Donaldson. Boston: G. K. Hall & Co., 1984. 215 – 228.
- Piper, Henry Dan. *F. Scott Fitzgerald: A Critical Portrait*. New York: Holt, Rinehart and Winston, 1965.
- Potts, Stephen W. *The price of Paradise: The Magazine Career of F. Scott Fitzgerald*. San Bernardino: The Borgo Press, 1993.
- Sklar, Robert. *F. Scott Fitzgerald: The Last Laocoön*. New York: Oxford UP, 1967.
- Stern, Milton R. *Tender is the Night: The Broken Universe*. New York: Twayne Publishers, 1994.